機動戦士ガンダム00　～run for money 2314～

カテゴリーF

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム００　～ｒｕｎ　ｆｏｒ　ｍｏｎｅｙ　２３１４～

【Ｎコード】

Ｎ９２５８Ｚ

【作者名】

カテゴリーＦ

【あらすじ】

機動戦士ガンダム００の登場人物達が金の為に走る……。勝つのは誰だ？

※不定期更新となります。予めご了承下さい。

※２０１２年１月２日、「逃走中×ガンダム００」からタイトル変更。

逃走者紹介

参加者の簡単な紹介とミッションへの姿勢

刹那・Ｆ・セイエイ
人類初の純粋種のイノベイター。ミッションには必ず参加する。

ロックオン・ストラトス（ライル・ディランディ）
他のガンダムマイスターと違い普通の人間。ミッションには積極的。

アレルヤ（ハレルヤ）・ハプティズム
二重人格の超兵。ミッションには積極的。

ティエリア・アーデ
ヴェーダがつくりだしたイノベイド。ミッションには積極的。

スメラギ・李・ノリエガ
ＣＢの戦術予報士。ミッションはＣＢ男性陣に任せている。

ラッセ・アイオン
トレミーの操舵士兼砲撃士。ミッションには積極的。

フェルト・グレイス
トレミーのオペ娘。刹那に絶賛片思い中。ミッションはＣＢ男性陣に任せている。

ミレイナ・ヴァスティ
トレミーのオペ娘。ティエリアに絶賛片思い中。ミッションはＣＢ男性陣に任せている。

アニュー・リターナー
トレミーの操舵士兼船医。ミッションへの参加はライル次第。

マリー・パーファシー（ソーマ・ピーリス）
アレルヤと同じく二重人格の超兵。ミッションへの参加はアレルヤ次第。

グラハム・エーカー
ソルブレイヴス隊隊長の元フラッグファイター。ミッションには必ず参加する。

ビリー・カタギリ
地球連邦軍技術顧問でグラハムの盟友。ミッションはグラハムに任せている。

ミーナ・カーマイン
宇宙物理学者。ミッションへの参加はビリー次第。

カティ・マネキン
地球連邦軍准将。ミッションはＣＢ勢やパトリックに任せている。

パトリック・マネキン
幸せのコーラサワー。カティにアピールするためにミッションには必ず参加する。

セルゲイ・スミルノフ
地球連邦軍大佐。ミッションへの参加は状況次第。

アンドレイ・スミルノフ

地球連邦軍大尉でセルゲイの息子。ミッションには積極的。

デカルト・シャーマン
刹那と同じ純粋種のイノベイター。ミッションへの参加は気分次第。

マリナ・イスマイール
アザディスタン第一皇女。ミッションは人任せ。

クラウス・グラード
地球連邦政府議員。ミッションへの参加は状況次第。

シーリン・バフティヤール
マリナの元側近。ミッションへの参加は状況次第。

沙慈・クロスロード
かつてＣＢに参加した経験をもつ。ミッションには消極的。

ルイス・ハレヴィ
かつてアロウズに所属していた。ミッションは人任せ。

リボンズ・アルマーク
２ｎｄシーズンのラスボス。ミッションへの参加は気分次第。

ヒリング・ケア
リボンズと同タイプのイノベイド。ミッションへの参加はリボンズ次第。

リヴァイヴ・リバイバル
アニューと同タイプのイノベイド。ミッションへの参加は状況次第。

リジェネ・レジェッタ
ティエリアと同タイプのイノベイド。ミッションへの参加は状況次第。

アリー・アル・サーシェス
リボンズに雇われた傭兵。ミッションへの参加は状況次第。

プロローグ（前書き）

オープニングゲーム前の話です。

プロローグ

～地球某所～

「ヴェーダが指定したポイントはここか……」

刹那・Ｆ・セイエイは携帯端末を片手にその地に立っていた。刹那だけでなく、他のガンダムマイスターやトレミーのブリッジクルーもいる。彼らも刹那と同様にヴェーダの指示でこの場にいる。

「なんだ？ただのテーマパークじゃねぇか」

「そうね……」

「楽しそうですぅ」

ロックオンがぼやき、アニューがそれに同調する。そしてミレイナは浮かれているようだ。

彼らが居る場所を一言で言うなら「夢と魔法の国」だ。その証拠に、いたるところにネズミのマスコットキャラクターを模したマークがある。

ソレスタルビーイングメンバーが話し合っていると、そこに近づく新たな人影が３つ現れる。

「よもや君たちに出会えようとはな」

「久しぶりだねクジョウ」

グラハム・エーカー、ビリー・カタギリだ。ビリーの腕にはミーナ・カーマインが抱きついている。そして彼らの登場を皮切りに続々と人が集まってくる。

「大佐〜、ここみたいですよ」

「准将だ。いい加減覚えろ」

「お前もこのような場所で遊びたかったか？」

「……いえ、そうは思いませんでした」

「息抜きができそうだ」

パトリック・マネキン、カティ・マネキン、セルゲイ・スミルノフ、アンドレイ・スミルノフ、デカルト・シャーマンだ。

「今日は楽しめそうね」

「そうだね、ルイス」

「子供たちも連れて来たかった……」

ルイス・ハレヴィ、沙慈・クロスロード、マリナ・イスマイールだ。マリナの両隣にはクラウス・グラードとシーリン・バフティヤールがいる。さらには……

「リボンズ、今日はデートね」

「お手柔らかに頼むよ」

ヒリング・ケアとリボンズ・アルマークだ。彼らのすぐ後ろにはリヴァイヴ・リバイバル、リジェネ・レジェッタ、アリー・アル・サーシェスの姿も見える。

「随分賑やかになってきたね……ん？」

アレルヤ・ハプティズムが呟くと、自身の持っている携帯端末に通信が入る。

「通信か？」

「ヴェーダからだな」

アレルヤだけでなく、この場に集まった者全員にヴェーダから通信が来たようだ。

「ここに集まった総勢２８人でゲームを行う」

「ハンターと呼ばれる者から逃げる鬼ごっこか……望むところだと言わせてもらおう」

「制限時間は２時間」

「一秒経過するごとに１０００円ずつ賞金が加算される……最後まで逃げきれば７２０万円か。無理矢理呼び出されて癪だったが、まあやってやるか」

「ただしハンターに確保された場合、賞金は０。ゲームから脱落…

…」

「また、エリア内に数カ所ある電話ボックスから自首の報告をすることで、時間に応じた賞金を受け取り、ドロップアウトすることが出来る……」

「どうやら我々に拒否権はないようだ。やるしかあるまい」

各々送られてきた文面を読んでいく。

「ハンターってこいつらか？」

パトリックが言うと皆がそれに注目する。そこには黒服に黒いサングラスの４体のハンターが封印されたボックスと色が全て異なる２８本の鎖がある。

「まずオープニングゲームというものをやるようだな」

通信端末の画面を見ながらティエリア・アーデが言った。ハンターボックスに注目していた面々も再び端末に視線を移す。

オープニングゲームのルールは本家逃走中と同じく好きな色の鎖を選び、一人ずつ引いていく。その中にはハンターボックスを解放する「ハズレ」の鎖が一本あり、それを引いた時点でタイマーが動きだしゲームスタートとなる。

鎖を引く順番は以下の通り。

０１．グラハム・エーカー
０２．フェルト・グレイス
０３．パトリック・マネキン

０４．ビリー・カタギリ
０５．ヒリング・ケア
０６．沙慈・クロスロード
０７．ロックオン・ストラトス
０８．ティエリア・アーデ
０９．シーリン・バフティヤール
１０．デカルト・シャーマン
１１．リヴァイヴ・リバイバル
１２．アリー・アル・サーシェス
１３．ミレイナ・ヴァスティ
１４．リボンズ・アルマーク
１５．マリー・パーファシー
１６．クラウス・グラード
１７．刹那・Ｆ・セイエイ
１８．セルゲイ・スミルノフ
１９．カティ・マネキン
２０．リジェネ・レジェッタ
２１．アレルヤ・ハプティズム
２２．スメラギ・李・ノリエガ
２３．ルイス・ハレヴィ
２４．ミーナ・カーマイン
２５．ラッセ・アイオン
２６．アンドレイ・スミルノフ
２７．アニュー・リターナー
２８．マリナ・イスマイール

「一番手は私か」

早速グラハムが鎖へ近づいていく。他の面々はその様子を遠巻きにして見物している。

いよいよオープニングゲームが始まるが、その様子はまた次回。

オープニングゲーム１（前書き）

オープニングゲームの様子です。

オープニングゲーム1

～某テーマパーク・中央広場～

ハンターボックスに繋がれた28本の鎖の前に、最初のプレイヤーであるグラハムがやってくる。

「心眼は鍛えている。これだッ！」

グラハムは迷うことなく黒色の鎖を選び、一気に引っ張った……。

シーン……。

ハンターは放出されず。

グラハム・エーカー、セーフ。

グラハムはその場を後にし、他のプレイヤー達から少し離れた場所からハンターボックスに注目する。ルールでは、鎖を引いた者は引いていない者よりもハンターボックスから離れた場所からゲームを開始できる。危険を冒した者の特権だ。

「次は私ですね」

フェルトが鎖の前にやってきた。

少し迷った末にピンク色の鎖を選び、おずおずと引いた。

シーン……。

ハンターは放出されず。
フェルト・グレイス、セーフ。

フェルトもグラハムと同様に少し離れた場所に移動する。

「幸せのコーラサワーの実力、見せてやるぜ！」

調子のいいことを言いながらパトリックが鎖の前に立つ。
何も考える様子もなくオレンジ色の鎖を手に持ち、勢いよく引いた。

シーン……。

ハンターは放出されず。
パトリック・マネキン、セーフ。

ゲームを乗り切りパトリックはその場を後にするが、離れた場所へは行かずカティの隣にやってきた。

「……何故こちらに来る？」

少し呆れ気味にカティはパトリックに問いかける。

「わかってるくせに～。大佐も意地悪ですね～」

「……准将だ」

ヘラヘラしながら言うパトリックにまたもや呆れつつ階級を訂正するカティ。しかしその顔は満更でもなさそうだ。

「僕の番だね」

今度はビリーが鎖の前にやってきた。そして品定めをするように鎖を見ていく。

「んー、どれにするかな？……よし、これにしよう」

選んだのは白色の鎖だ。

ビリーはすぐに鎖を引いた。

シーン……。

ハンターは放出されず。

ビリー・カタギリ、セーフ。

ひと仕事終えたビリーは先にゲームを終えているグラハムのもとに向かおうとした。だが何者かに腕をつかまれ、足止めさせられてしまった。

「できればその手を離してくれると助かるな。ミーナ」

腕をつかんだのはミーナだ。

「ビリーもここにいて。マネキンさんみたいに」

「……（困ったなぁ）」

ミーナはどうやらパトリックとカティのやりとりを羨ましがっているようだ。ビリーはどうしたものかと悩んでいる。

「ねぇ～いいでしょ？」

ミーナはなおも迫る。ビリーは反射的に目をそらし、この様子を見ていたであろうグラハムと目が合う。ビリーは彼に助けてくれとアイコンタクトで伝える。だが……。

「……」（プイッ）

すぐに目をそらされてしまった。助けが来ないとわかったビリーはミーナの好きにさせることにした。ちなみにこのときグラハムは、

（……人の恋路の邪魔をするほど私は野暮ではない）

という言葉を心の中でビリーに投げかけた。

「そろそろ引いていい？」

多少怒気を含みながらヒリングが言った。それを合図にビリーとミーナに注目していた何人かの者たちはハンターボックスへと視線を移した。

「これね」

ヒリングはエメラルドグリーンの鎖を選び、引いた。

シーン……。

ハンターは放出されず。
ヒリング・ケア、セーフ。

「先に行ってるよ、リボンズ」

ヒリングは他のプレイヤーたちから離れていく。声をかけられたリボンズは右手を軽く上げて彼女を見送る。

「次は僕だ……」

沙慈が緊張の面もちで鎖の前に立った。そして小豆色の鎖を選び、多少ビビりながら引いた。

シーン……。

ハンターは放出されず。
沙慈・クロスロード、セーフ

「お先に、ルイス」

「あっ……うん」

ルイスに一声かけてから沙慈もプレイヤーたちから離れていった。このときルイスは沙慈を引き留めようかと少し思ったがやめることにした。ミーナのように自分のわがままでゲームの進行を阻害したくないと考えたからだ。

「次は俺か……」

ロックオンが鎖を引くためにやってきた。

「ハズレを狙い撃たないようにしないとな」

慎重に鎖を選んでいくロックオン。そして深緑色の鎖を手にとり、引いた。

シーン……。

ハンターは放出されず。
ロックオン・ストラトス、セーフ。

「ふぅ、一安心だぜ」

ロックオンは安堵し、その場を後にする。そのときにアニューに声を掛けたのは言うまでもない。

終わりのわからないオープニングゲーム。ハズレの鎖でハンターを放出し、ゲームスタートの鐘を鳴らすのは、誰だ……？

オープニングゲーム１（後書き）

次回の更新は来年になるかもしれません。

オープニングゲーム2（前書き）

年内にもう一話更新できました
今回でオープニングゲームが終わります。

オープニングゲーム2

これまでに7人のプレイヤーがオープニングゲームに挑戦したが、未だにハンターは放出されていない。そろそろハズレの鎖が出ても良い頃合だ。

そして今、8人目のプレイヤーであるティエリアが鎖を選んでいる。

「引かせてもらう」

少し考えた末にティエリアは紫色の鎖を手にとり、特に表情も変えずに引き抜いた。

シーン……。

ハンターは放出されず。

ティエリア・アーデ、セーフ。

鎖を引き終えたティエリアはその場から離れる。と同時に入れ替わるように9人目のプレイヤーであるシーリンがやってきた。

「ここでハズレを引いたら確実に嫌われるわね……」

そんな独り言を言いつつ、藍色の鎖を選択した。そして引き抜く。

シーン……。

ハンターは放出されず。
シーリン・バフティヤール、セーフ。

鎖から手を離し、その場を去る。途中、クラウスに対し「先に行っている」と目だけで合図する。クラウスもそれに対して無言で頷く。

その後、１０人目のプレイヤーであるデカルトが鎖の前に立った。

「これはハズレだ……」

ある一本の鎖を見つめてデカルトは呟いた。どうやら純粋種のイノベイターとしての勘でどの色がハズレであるか見抜いたようだ。その証拠に彼の両目の虹彩が金色に輝いている。

「ならばこれを引く」

デカルトは見つめていた鎖のすぐ近くにある銀色の鎖を引いた。その結果は……？

シーン……。

ハンターは放出されず。
デカルト・シャーマン、セーフ。

この結果が当然だとでもいうようなドヤ顔でデカルトは残ったプレイヤーたちから離れていく。

「これが純粋種の力か……」

デカルトの後にやってきたリヴァイヴは少し驚いていた。彼もイノベイターに準ずるイノベイドという存在だが、純粋種には及ばないのだ。

しかし、すぐに気を取り直して鎖を選んで引いた。彼が選んだ色は薄紫色だ。

シーン……。

ハンターは放出されず。
リヴァイヴ・リバイバル、セーフ。

「まあこんなものか」

リヴァイヴは一人ぼやいてヒリングのいる方へと歩いていった。

「さぁて、俺の番が回ってきたみてぇだな」

今度はサーシェスがゲームに挑むためにやってきた。

「ここでハズレ引いちまっても俺を恨むなよ！」

後方にいるプレイヤー全員に対しサーシェスは保険をかけるように言いながら鎖を選び始めた。そして赤色の鎖を手にとった。

「ちょいさー！」
お決まりのかけ声と共に鎖を引っ張ったサーシェス。結果は……？

シーン……。

ハンターは放出されず。
アリー・アル・サーシェス、セーフ。

サーシェスは心の中で安堵しつつも、それを表に出すことなくその場を後にする。

「ミレイナの番が来てしまったですぅ……嫌な予感がするですぅ」

「まだ鎖はたくさんあるから大丈夫よ、ミレイナ。行ってきなさい」

次のプレイヤーであるミレイナはかなりネガティブになっていた。
そんなミレイナをスメラギが励まし、鎖の前に行かせた。

「どれにするか迷うですぅ……」

かなり慎重に鎖を選んでいくミレイナ。

「これにするです」

熟考の末にミレイナは黄色の鎖を選択した。そして意を決して選んだ鎖を引いた。その結果……。

ガタンッ！プシュー……。

ボックスが開け放たれ、ドライアイスの煙と共に４体のハンターが放出された。

ミレイナ・ヴァスティ、アウト。ゲームスタート。

「乙女の勘が当たってしまったですぅ！皆さんごめんなさいですぅ！」

ミレイナは他のプレイヤー全員に詫びを入れるが、誰も聞いていなかった。

「そら逃げろ！」

「マリー、一緒に行こう！」

「ええ！」

「やってくれるじゃないか……」

「待ってよ～ビリー！」

蜘蛛の子を散らすように四方八方へと逃げていく逃走者たち。それを追跡する、４人のハンター。彼らは、短距離選手並みの瞬発力とマラソンランナー並みの持久力を併せ持つ。そして視界に入った逃走者を、どこまでも追いかける。振り切るのは難しい。

ハンターの一人がある逃走者に狙いを定める。

……逃げ遅れたミレイナだ。

「ハンターさん速すぎるですぅ！」

ミレイナも懸命に走り、ハンターから逃げる。しかし、ハンターは彼女との距離をどんどん詰めていき……。

ポン……。

ミレイナはハンターに両肩をタッチされ、確保。ゲーム開始から僅か１０秒弱の出来事であった。

オープニングゲームが終わりを迎え、ハンターとの逃走ゲームが始まった。ハンターから見事逃げきり、賞金を手に入れるのは誰だ？

オープニングゲーム２（後書き）

次回の更新こそ来年になると思います。

ＭＩＳＳＩＯＮ－０１－１（前書き）

諸君、新年の挨拶、即ち「明けましておめでとう」という言葉を、謹んで贈らせてもらおう。

MISSION－01－1

オープニングゲームにより４体のハンターが放出され、逃走ゲームの幕が上がった。ミレイナが確保されたため、残りの逃走者は２７人だ。

～某テーマパーク・Ｂブロック～

ここは未開の地の冒険や海賊の世界をテーマにしたブロックだ。ちなみに、このテーマパークはＡブロックからＧブロックに分かれており、現時点ではＧブロックは閉鎖されていて中に入ることは不可能だ。

今、Ｂブロックに一人の逃走者が現れた。

「無責任なこと言っちゃったけど、あの子大丈夫かしら？」

スメラギだ。どうやら彼女は自分が無責任にミレイナを励まし、ハズレの鎖を引かせてしまったことに少し罪悪感を覚えているようだ。

彼女がＢブロック内を見て回っていると、自分の携帯端末が鳴った。

スメラギはその音に少し驚きながらも端末を手にとり、画面を確認する。ヴェーダからの通信だ。

「確保情報……ゲーム開始より００１２セコンド、中央広場にてミレイナ・ヴァスティ確保！？」

確保情報だ。逃走者がハンターに確保されると、ヴェーダから経過時間、場所、確保された逃走者の名前が残りの逃走者全員に通知されるのだ。

「……後で一応謝っておこうかしら？」

確保情報をみてスメラギは一人呟いた。

～Eブロック～

ここは西洋のおとぎ話をテーマにしたブロックだ。

「こんなにも早く確保者が出るとは……厳しい戦いになりそうだ」

カティが通信端末から目を離しながら言う。

彼女が周囲を警戒していると、どこからか男の声が聞こえてきた。

「大佐～！」

カティのことをこう呼ぶ者は一人しかいない。自称幸せのコーラサワーことパトリック・マネキン……カティの夫だ。

カティはいつものように階級を訂正しようとしたが、パトリックの後方に黒い影を見つけた。ハンターだ。

「助けてくださ～い！」

かなり慌てた様子でパトリックが走ってきた。ハンターを引き連れて。

「こちらに来るな馬鹿者！」

カティは不甲斐ない夫にそう吐き捨てつつ自らも走る。

やがてパトリックが彼女の隣に並ぶ。

「二手に分かれる。貴様はそっちだ！」

並んだパトリックを渾身の力で左に突き飛ばすカティ。だがそれは失策だった。突き飛ばされたパトリックはアトラクションの陰に隠れる形でハンターの視界から消えた。そのせいでハンターは視界から消えていないカティに目標を変更したのだ。

カティは舌打ちをしながら隣のFブロックの方へと逃げていく。しかしハンターのスピードは失われず、距離ばかりが縮まっていく。

そして……。

ポン……。

無情にも確保されてしまった。

「……帰ったら説教だ」

先ほどのパトリックの顔を思い浮かべながらカティはぼやき、牢獄へと歩みを進めた。

一方、突き飛ばされたパトリックはハンターが追ってきていないとわかり、息を整えるために歩いていた。

「ハンターは撒いたけど、大佐とはぐれちまった……」

愛しの大佐を見つけたと思ったらすぐにはぐれてしまったため、パトリックは少々落ち込み気味だ。

パトリックが俯きながら歩いていると、持っている端末に通信が入った。すぐさまそれを読んでいく。

「確保情報……ゲーム開始より０２７７セコンド、Ｅブロックにてカティ・マネキン確保！？そんなぁ～！」

カティが確保され、ゲームに対するモチベーションが下がるパトリック……自分のせいで彼女が確保されたという自覚はないようだ。

～某所・モニタールーム～

「ゲーム開始から5分足らずで確保者が2人……」

表示された多数の映像をみながら何者かが呟く。声色からして女性のようだ。

彼女が横のサイドテーブルから飲み物をとり、飲み始めると背後から人影が近づいてきた。こちらは男性のようだ。

「お嬢様、そろそろ……」

男は女の耳元で囁くように言った。

「ええ、わかっています。お楽しみはこれからですわね……」

飲み物をサイドテーブルに戻しながら女が答えた。それと入れ替えるように置いてあったリモコンを手にとる。そして「01」と書かれたボタンをおもむろに押した……。

〜牢獄〜

「皆さん、ミレイナの分まで頑張ってくださいです……」

最初の脱落者であるミレイナが檻の中で一人小さく言った。どこか寂しそうに見える。そこへ先ほど確保されたカティがやってきた。

「マネキンさんも捕まったですか？」

ミレイナが少し表情を明るくしながらたずねた。やはり寂しかったようだ。

「……馬鹿な夫のせいでな」

そう言って檻の中に入るカティ。

その後カティはミレイナからパトリックとの結婚生活について根掘り葉掘り質問されたという……。

〜Aブロック〜

ここは２０世紀はじめごろの町並みを再現しているショッピングモールのような場所で、アトラクションは無く、レストランや土産物屋などが並んでいる。

そこを駆ける一人の逃走者。後ろには、ハンター……。

「ハァ、ハァ……」

ハンターに追われているのはフェルトだ。ハンターの脚力はすさまじく、フェルトを猛追している。

フェルトは走り続けながらも内心諦めていた。確保されることを覚悟した……。

しかし、フェルトは何者かに腕を捕まれそのまま加速していく。ハンターとの距離が広がっていき、曲がり角を使って撒くことができた。

「危ないところだったな」

「せっ、刹那！？」

フェルトの顔は茹で蛸のように赤く染まった。今まで手を引いてくれていたのは、彼女が想いを寄せている刹那・Ｆ・セイエイだったからだ。

「顔が赤いぞ？」

「えっ！？かっ、かなり走ったから……あっ、ありがとう、刹那」

刹那の指摘に対し、しどろもどろになりながらもごまかし、礼を言うフェルト。

「仲間を助けるのは当然だ……ん？通信か？」

二人の持つ端末が同時に鳴った。確保情報かと思う二人だが、文面には違うことが記されていた。

「エリア内に新たに５つのハンターボックスが出現した。あと１５分でハンターが解放される……」

「これを阻止する術が一つだけある」

「ハンターボックスの左右にあるレバーを二人同時に引くことによりこれを消滅させることが可能だ」

「なお、このミッションへの参加は任意である。諸君らの健闘に期待する……か」

この通信は、刹那とフェルトだけでなく、エリア全域にいる逃走者全員に送られている。果たして何人の逃走者がミッションに挑むのか……？

ＭＩＳＳＩＯＮ－０１　ハンター増加を阻止セヨ。

次回へ続く……。

ＭＩＳＳＩＯＮ－０１－１（後書き）

次回からミッション本格始動です。

ＭＩＳＳＩＯＮ－０１－２（前書き）

本格的にミッション編がスタートします。

MISSION－01－2

カティ・マネキンが確保され、残る逃走者は２６人となった。そんな中、ついに最初のミッションの通知がヴェーダから逃走者全員に送信された。

「ソレスタルビーイングは確実に動くだろう。ならば私も動かずにはいられんよ！」

「大佐にいいとこ見せるためにも、俺がやらなきゃな！」

「マリー、僕らもやろう」

「そう言うと思っていたわ」

「ソレスタルなんたらに任せるか……」

「グラハムがやってくれるだろうね」

志願する者と静観する者とに分かれた逃走者たち。パトリックはカティ確保のショックからすっかり立ち直ったようだ。なんとも単純な男である。

～中央広場～

「どうするの、刹那？」

Ａブロックから中央広場に移動した刹那とフェルト。フェルトは刹

那にミッションへ参加するのか問いかける。

「参加するつもりだ。お前はどうする？」

「私も協力する」

二人ともミッションへの参加を決意した。互いの意志を確認した後、二人は端末を手にとり通信回線を開いた。刹那はアレルヤに、フェルトはロックオンに連絡をとるようだ。

刹那の作戦はこうだ。実働部隊（ハンターボックスを消滅させるチーム）は今行動を共にしている刹那&フェルト、アレルヤ&マリーの二組。他のソレスタルビーイングメンバーはハンターボックスの捜索を行い、見つけ次第実働部隊に報告。捜索部隊も誰かと合流できれば実働部隊になってもらう。というものだ。

「作戦はわかったよ」

「オーライ。アニューにも伝える」

伝言ゲームの要領で他のソレスタルビーイングメンバーにも作戦が伝わっていく……。

「わかったわ、ライル」

「了解した」

「おう、任せろ！」

「そのプランでいきましょう」

こうして、ソレスタルビーイングによるハンターボックス掃討作戦が始まった。

～Ｃブロック～

ここは米国開拓時代の西部の町をテーマにしたブロックだ。

このブロックを辺りを見回しながら歩いている逃走者が一人……ソレスタルビーイングメンバーのラッセ・アイオンだ。

彼は捜索部隊としてハンターボックスを探している。

「ん？……あれか？」

大きな雷の山のアトラクションの入り口付近にハンターボックスを発見した。

ラッセは刹那に伝えるべく通信回線を開こうとするが、自身に近づいてくる者に気づいた。

「マジかよッ！」

ハンターだ。ラッセはすぐさま体を１８０度回頭させ、駆けだした。

１ｓｔシーズンのバカンスの時に一人黙々と筋トレをしていた男だ。

体力はあるようで、ハンターを徐々に引き離していく。

「振り切れそうだな」

ラッセは後方を確認しながら言った。そして再び前を向いたとき、彼は目を見開いた。前方から接近してくるもう一人のハンターを見つけたからだ。

「南無三！」

ラッセは前後から挟撃される形となり、逃げ場を失った。そして……。

ポン……。

ラッセ・アイオン、確保。
残り２５人。

確保されたラッセは少し悔しそうに去っていった……。

～Ｅブロック～

先ほどカティが確保された辺りを二人の逃走者が歩いている。アレルヤとマリーだ。

やがて二人は幽霊屋敷のアトラクションの入り口付近にハンターボックスを発見する。

「どうやらこれのようね……」

ハンターボックスに近づいていく二人。そしてレバーを握りしめる。

「三つ数えたら引こう……ん？」

二人の持つ端末が鳴った。

「確保情報……ゲーム開始より１０２７セコンド、Ｃブロックにてラッセ・アイオン確保……」

「彼の分まで頑張りましょう……」

仲間の確保にショックを受けながらも再びレバーを握る。

「いくよ……１、２、３！」

ガコンッ……。

ＭＩＳＳＩＯＮ　ＣＯＭＰＬＥＴＥ

レバーを引いて数秒でハンターボックスは緑色の粒子となって消滅した。

「やったわね」

「次を探そう」

二人はその場に留まることなく次のハンターボックスを探すために動き出した。残りはあと４つだ。

～Ｆブロック～

ここはネズミのマスコットキャラクターとその仲間たちが住む町という設定のブロックだ。

「刹那、あったよ」

どうやらフェルトがハンターボックスを発見したようだ。刹那もそれを確認する。

二人はハンターボックスの傍まで行き、レバーを握った。そして二人同時に引いた。

ガコンッ……。

ＭＩＳＳＩＯＮ　ＣＯＭＰＬＥＴＥ

ハンターボックスを消滅させることができた。残るハンターボックスはあと３つだ。

～Ｄブロック～

ここは小動物たちの住む郷をテーマにしたブロックだ。

「どうしよう……見つけたけど……」

沙慈だ。彼の目の前にはハンターボックスがある。

しかし、一人ではこのミッションを遂行することは不可能だ。そう思った沙慈は刹那に連絡をとることにした。彼なら必ずミッションに参加していると考えたからだ。

沙慈はポケットから端末を取りだそうとするが、視界の片隅に黒い影を見つけた。ハンターだ。

身を隠すために屈もうとする沙慈だったが、ハンターは彼を捉えたようだ。

「こっち来たッ！」

慌てて逃げ出す沙慈。しかし慌てすぎたためか、バランスを崩し転倒してしまう。そこにハンターが近寄っていき……。

ポン……。

沙慈・クロスロード、確保。
残り２４人。

あっさり確保となった。

～Ａブロック～

「さて、どうしたものか……」

ハンターボックスを発見した者がここにもいた。アンドレイだ。しかしこの場には他の逃走者がいないため、難儀していた。

彼が手をこまねいていると、懐にある端末が鳴った。

「確保情報……ゲーム開始より１１３０セコンド、Ｄブロックにて沙慈・クロスロード確保……次々に確保者が出ているな」

アンドレイは少し危機感を覚えたが、今はミッションに集中することにした。

彼は少し動いて他の逃走者を探した。程なくして一人の逃走者がやってきた。

「アンドレイか？」

やってきたのはセルゲイだ。彼はアンドレイの後方１５ｍほどにあるハンターボックスも視界に入れる。

「時間が迫っている。やるぞ」

「わかっています」

ミッションのタイムリミットまで残り５分を切っていた。二人は駆け足でハンターボックスへ近づき、左右のレバーを同時に下ろした。

ガコンッ……。

ＭＩＳＳＩＯＮ　ＣＯＭＰＬＥＴＥ

ハンターボックスの消滅に成功した。

残るハンターボックスはあと2つ。逃走者たちはこれを消滅させ、ハンターの増加を食い止められるのか？

次回へ続く……。

ＭＩＳＳＩＯＮ－０１－３（前書き）

最初のミッションが終わります。

MISSION－01－3

ハンター放出まで5分を切った。これまでに3つのハンターボックスを消滅させることに成功したが、沙慈とラッセが確保されてしまった。ハンターボックスもまだ2つ残っている。

～Cブロック～

このブロックに一人の逃走者が現れた。ロックオンだ。

彼はハンターボックスの捜索を行っており、辺りを見回しながら歩いている。

「おっ、これか？」

見つけたようだ。

彼は作戦通り刹那に連絡することにした。だが途中で手を止めた。何者かが近づいてきたからだ。

「ジーン1、どうした？」

「時間がねぇ、手伝ってくれ」

やって来たのはクラウスだ。ロックオンはハンターではなかったことに安堵しつつ、ハンターボックスを指さしながら手短に言った。

「わかった」

クラウスも瞬時に状況を理解し、ロックオンと共にハンターボックス横のレバーを握った。

ガコンッ……。

ＭＩＳＳＩＯＮ　ＣＯＭＰＬＥＴＥ

同時にレバーを下ろし、ハンターボックスを消滅させることができた。残りはあと１つだ。

～中央広場～

「なかなか見つからないわね……」

「早くしないと……」

アレルヤとマリーがハンターボックスの捜索を行っている。タイムリミットが迫っているためか、二人の表情には焦りの色が見える。

二人が難儀していると、アレルヤの端末に通信が来た。ティエリアからだ。

『Ｄブロックにてハンターボックスを発見した。至急こちらに来てほしい』

「了解……！？」

『どうした、アレルヤ？』

ティエリアからの報告を聞いたアレルヤはすぐにＤブロックへ向かおうとしたが、何かに気づいた。ティエリアも何かあったのかと懸念する。

「ハンターだ！」

『何だと！？』

そう叫んでアレルヤは通信を切った。ティエリアも少し動揺している。

「マリー、Ｄブロックに行ってティエリアと合流するんだ。僕はハンターの気を引く」

アレルヤとマリーの体力ならハンターから逃げきることは可能なはずだ。だが普通に逃げればＤブロックへはたどり着けず、ミッションを遂行できないと考えたアレルヤは、自らが囮になり、マリーだけをＤブロックへ行かせ、ティエリアと合流してもらうことにした。

「わかったわ！」

マリーはアレルヤの意図がわかったようだ。短く返答し、Ｄブロックを目指して走り始めた……。

～Ｄブロック～

「ハンターに見つかったのか……」

ティエリアはアレルヤたちがハンターに見つかったことを通信越しに知った。

彼は刹那に連絡すべく回線を開こうとしたが、視界に黒い影が入ってきた。ハンターだ。しかも彼の方に向かってきている。

「ええいッ！」

ティエリアは不本意ながらもその場を離れることにした。

そしてティエリアと入れ違いになる形でマリーがハンターボックス付近にやってきた。ティエリアがハンターに追われていることを彼女は知らない……。

「アーデさんがいない……」

ティエリアがここにいないのでマリーは少し不安になった。

マリーはハンターボックスから離れてミッションに協力してくれる逃走者を探すことにした。

〜Eブロック〜

「この私がミッションに参加できていないとは……」

グラハムは小走りで周囲を見渡し、ハンターボックスを探していた。

彼は焦っていた。ミッションへの意気込みは十分だったが、ハンタ

ーボックスを発見できず、戦果をあげられずにいたからだ。

「さてどうしたものか……」

グラハムが思案する。すると、２５ｍほど前方から声が聞こえてきた。

「そこの方、手伝ってください！」

「その申し出、今や遅しと待っていた！」

声をかけたのはマリーだ。嬉々として申し出を受けるグラハム。

二人はハンターボックスへと急ぐ。残り時間は少ない。

「会いたかった……会いたかったぞ、ハンターボックスッ！」

「早くしてください」

テンションが上がるグラハムをマリーが急かす。そして二人はレバーを握り、同時に下ろした。

ガコンッ……。

ＭＩＳＳＩＯＮ　ＣＯＭＰＬＥＴＥ

ハンターボックスを消滅させることができた。これで全てのハンターボックスが消滅したことになる。

～Bブロック～

「ハンターは撒けたようだが、ミッションが……」

ティエリアだ。アレルヤがハンターに見つかり、さらには自分もハンターボックスから離れてしまったため、彼はミッションの失敗を覚悟していた。

ティエリアが落ち込み気味に歩いていると、持っている端末が鳴った。

「勇敢な逃走者たちの活躍により、全てのハンターボックス消滅に成功した……一安心だな」

ミッションの成功を喜ぶティエリア。

ミッション成功の知らせは逃走者全員に通知されていた。

「うまくいったようだね」

「やるじゃないか……」

「ハンターは増えずに済んだか」

ミッションの成功に歓喜する逃走者たち。だが彼らは知らない。次のミッションが待ち受けていることを……。

次回へ続く……。

ＭＩＳＳＩＯＮ－０１－３（後書き）

次回からミッション２です。

ＭＩＳＳＩＯＮ－０２－１（前書き）

新たなミッションが始まります。

MISSION－02－1

刹那、ロックオン、アレルヤ、フェルト、マリー、グラハム、クラウス、セルゲイ、アンドレイがハンターボックスを消滅させ、ハンターの増加を阻止した。

～Cブロック～

「俺も活躍したかったぜ……」

パトリックが歩きながら言った。彼もミッションを遂行すべくハンターボックスを探しはしたが、結局見つけられずじまいだった。

「ハァ～……」

その背中は少し哀愁を帯びていた……。

～モニタールーム～

無数に表示される逃走者たちの映像を見ている女性……。表情から楽しんでいることがわかる。

「これはまだ序の口でしてよ」

彼女は再びリモコンを手にとり、「02」と書かれたボタンを押した……。

～Ｂブロック～

このブロックにあるベンチの一つに、一人の女性が腰掛けて休憩していた。

「まだハンターに出くわしていないわね……」

マリナだ。彼女はゲーム開始時から現在まで一度もハンターの姿を見ていない。なかなかの強運の持ち主だ。

マリナが座りながら周りを見ていると、彼女の持っている端末に通信が来た。

「今から１０分後にエリア内に新たに3体のハンターを放出する……何ですって！？」

マリナは通信文に驚く。１０分もすればハンターの数が7人に増えてしまうのだから無理もない。

「そこで諸君にはＧブロックを解放することを許可する……」

どうやらハンターが増えるのと引き替えに逃走エリアを拡大できるようだ。

「Ｇブロックの解放には１０人の逃走者がゲート横にある認証装置に持っている端末をセットして認証を行う必要がある……」

第二のミッションの内容が明らかになった。

ＭＩＳＳＩＯＮ－０２　逃走エリアを拡大セヨ。

～Ａブロック～

「Ｇブロックはここからすぐ近くね」

ミッションの内容を把握したシーリンが言った。視線の先にはＧブロックを塞いでいるゲートがある。

彼女はすぐさまゲートへ向かった。程なくして認証装置も見つけた。

「これね」

確認するように言いながら端末をセットする。

ピピッ……。

ＭＩＳＳＩＯＮ　ＣＯＭＰＬＥＴＥ

認証に成功した。これでＧブロック解放に必要な認証数はあと９つだ。

～Ｅブロック～

「今回も俺はやんねぇ」

サーシェスだ。逃走者はまだ２４人おり、その中の誰かがやるだろうと考えていた。と、そこへ……。

「おでましか！」

ハンターだ。どうやら彼を捉えたようだ。

Ｃブロック方面ひ逃げるサーシェス。

「！？」

前方に人影を見つけた。ビリーだ。あちらはこの逃走劇に気づいていないようだ。そしてサーシェスは閃いた。

「ちょいとごめんよ～」

サーシェスはすれ違いざまにビリーを後ろに蹴りとばしつつ加速し、自分とハンターの間にビリーが来るような位置に走りながら移動する。

「何だい、いきなり……？」

ビリーが呆気にとられていると、後ろからハンターが近づき……。

ポン……。

ビリー・カタギリ、確保。残り２３人。

「同情するぜぇ、かわいそうになぁ～！」

サーシェスはビリーを盾にすることでハンターを撒いた。なんとも狡猾な男だ。

〜中央広場〜

Gブロックへ向かう一人の逃走者がいた。

「Gブロックはここからそんなに遠くないわね……」

ミーナだ。ミッションへ参加するかどうか迷っているようだ。

彼女が考え込んでいると、端末に確保通知が送信されてきた。

「ゲーム開始より１８３４セコンド、Eブロックにて……ビリー・カタギリ確保！？」

ビリーの確保に衝撃を受けるミーナ。

「……自首しよ」

ビリーが確保された今、彼女にゲームを続ける理由は無いようだ。

ミーナは広場の一角にある電話ボックスに入っていった。

「ミーナ・カーマイン、自首するわ」

ミーナ・カーマイン、自首成立。残り２２人。

～Ａブロック～

先ほどシーリンがいた所と同じ場所に、一人の逃走者がやってきた。

「わざわざ不利な条件でゲームをする必要はない」

リヴァイヴだ。彼もミッションに参加すべく動いたのだ。

彼がゲート前までやってきて認証を行おうとしたとき、手に持っている端末が鳴り出した。

「ゲーム開始より１８９３セコンド、ミーナ・カーマイン自首……人間は情けないな」

自首をした者を嘲笑しつつ、リヴァイヴは端末を装置にセットする。

ピピッ……。

ＭＩＳＳＩＯＮ　ＣＯＭＰＬＥＴＥ

「さて、これからどうす……！？」

後ろを振り向いた瞬間リヴァイヴは一瞬焦った。ハンターがやってきたのだ。

彼の後ろはゲートで塞がれている。前からはハンター。

「させるか！」

幸い道幅は広く、彼はうまくハンターをかわすことができた。

しかし曲がり角に差し掛かったとき、何者かの足がリヴァイヴの邪魔をした。そのまま転ぶリヴァイヴ。そして……。

ポン……。

リヴァイヴ・リバイバル、確保。残り２１人。

「まさかこの私が……！」

悔しそうに言うリヴァイヴ。

一方、リヴァイヴとハンターの死角となるところに一人の逃走者が腕を組みながら壁に凭れ、不敵な笑みを浮かべていた……。

～Ｅブロック～

「これがゲートか」

「そうみたい……」

刹那とフェルトもＧブロックを封鎖するゲートの前まで来ていた。

そのまま順番に端末を装置にセットした。

ピピッ……。
ＭＩＳＳＩＯＮ　ＣＯＭＰＬＥＴＥ

二人は認証に成功した。必要な認証数はあと６つだ。

「成功だな……！？」

「どうしたの？」

「隠れていろ。すぐに戻る」

刹那はフェルトを物陰に隠れさせ、駆けだしていった。

実は、彼らはハンターに捕捉されていたのだ。それに気づいた刹那は、ハンターを遠ざけるべく動いたのだ。

フェルトの方は、心の中で刹那に礼を言いながら端末を手にとり、ソレスタルビーイングメンバーを招集することにした。Ｇブロックの解放にはまだ協力者が必要だからだ。

～牢獄～

最初にミレイナが確保されてから時間が経ち、檻の中が賑やかになっている。確保された者たちは和気あいあいと談笑している。

そんな中、新たな確保者としてリヴァイヴがやってきた。心底悔しそうな顔をしている。

「……どうかしましたか？」

皆を代表して沙慈が声をかける。

それを受けてリヴァイヴは自分が確保に至った経緯を話した。

「……」

あまりにも呆気ない捕まり方に言葉が出ない一同。リヴァイヴも下手に慰められることを望んではいないようだ。

リヴァイヴを確保に追い込んだ者は誰なのか。その正体はまだ誰にもわからない……。

Gブロックの解放のために認証を行った逃走者は現在4人。あと6人の認証を済ませ、Gブロックを解放することができるのか？

次回へ続く……。

ＭＩＳＳＩＯＮ－０２－１（後書き）

謎の逃走者はこれからも暗躍する予定です。

MISSION－02－2（前書き）

更新です。

MISSION－02－2

第二のミッションを遂行した逃走者は４人。残り６つの認証を行うのは誰だ……？

～中央広場～

「リボンズは動かないみたいだし、今回もパス」

広場を歩いているのはヒリングだ。ミッションに参加するつもりはないようだ。

彼女がＧブロックとは逆方向を目指して歩いていると、自身の端末が鳴った。

「ゲーム開始より１９４７セコンド、Ａブロックにてリヴァイヴ・リバイバル確保！？」

リヴァイヴの確保情報だった。

「何やってんのさ……」

そう言うとヒリングは再び歩きだした。

だが、このとき彼女は気づいていなかった。リヴァイヴを脱落させた逃走者の存在には……。

～Bブロック～

今、このブロックからGブロック封鎖へと動いている逃走者が一人。

「早くライルと合流したいわ」

アニューだ。彼女はフェルトからの協力要請で封鎖ゲートへと向かっていた。

「ここからだとAブロック側から行った方が近道ね……」

端末に表示された地図データを見ながら呟いた。

アニューが歩き続けていると、後方から黒い影が……ハンターだ。

「！？」

アニューは接近するハンターに気づき、Aブロックへと走り出した。

～Aブロック～

アニューとハンターの逃走劇を見ている者がいた。

「好機は逃さない……」

リヴァイヴを脱落させた例の逃走者だ。どうやらトラップの準備をしているようだ。

アニューとハンターがトラップポイントに近づいてくる……。

「……（今だッ！）」

何かを思い切り引く謎の逃走者。それからすぐにアニューがバランスを崩し転倒する。そして……。

ポン……。

アニュー・リターナー、確保。残り２０人。

アニューは何が起きたのかわからなかったが、自分の足元にロープを見つけ、状況を理解した。誰かにしてやられたのだ。しかもかなり古典的な罠で。

アニューを脱落させた逃走者は既に走り去り、曲がり角に消えた後だった。ハンターもそれを追跡するが、見失ってしまった……。

～Ｅブロック～

フェルトが辺りの様子を窺っていると、逃走者が一人やってきた。

「俺が一番乗りみたいだな」

ロックオンだ。フェルトの協力要請でここに来たのだ。

「さっさと終わらせるか……」

そう言ってロックオンが端末を認証装置にセットしようとしたとき、

二人の端末が同時に鳴った。

「ゲーム開始より２１３０セコンド、Ａブロックにて……アニュー確保！？」

少し衝撃を受けるロックオン。

「まぁただのゲームだ」

ロックオンは別段落ち込む様子も見せずに端末を認証装置にセットする。

ピピッ……。

ＭＩＳＳＩＯＮ　ＣＯＭＰＬＥＴＥ

認証に成功した。これでＧブロック解放に必要な認証数はあと５つだ。

～中央広場～

先ほどヒリングがいた場所に逃走者が一人現れた。

「ミッションは任せるつもりだったけど、確保者が続出してる今の状況じゃ私も動かないと人手が足りないでしょうね」

スメラギだ。ミッションを遂行すべく封鎖ゲートへと向かっている。

すると、そこへ……。

「嘘でしょ！？」

ハンターだ。しかもスメラギを捕捉したようで、彼女のほうに向かっていく。

来た道を引き返して逃げるスメラギ。しかしハンターは彼女に肉薄していく。そして……。

ポン……。

スメラギ・李・ノリエガ、確保。残り１９人。

また一人確保者が出てしまった……。

〜Ｅブロック〜

ロックオンが認証を済ませてると、また別の逃走者がやってきた。

「やぁ、二人とも」

アレルヤだ。彼もまたミッションのためにここに来たのだ。

あいさつもそこそこに、彼は自分の端末を装置にセットした。

ピピッ……。

ＭＩＳＳＩＯＮ　ＣＯＭＰＬＥＴＥ

認証に成功した。これで必要な認証数はあと４つだ。
認証を終えたアレルヤは装置から端末を外した。その直後、三人の端末に通信が入った。
「おいおいまたかよ」
「スメラギさん……」
スメラギの確保情報だった。
次々に逃走者が戦線離脱していくため、３人はミッションを成功させられるか不安になっていた……。

〜中央広場〜

このブロックとGブロックを隔てるゲートの前に逃走者が一人現れた。
「今度こそやってやるぜ」
パトリックだ。かなり意気込んでいるようだ。
彼が装置に端末をセットしようとすると、誰かが走ってくる音が聞こえてきた。
「誰だ?……ってハンターじゃねぇか！」

ハンターに見つかったパトリック。スメラギが確保されてからそれほど時間が経っていなかったためか、ハンターがまだこの付近を徘徊していたのだ。

「なんでこうなるんだよぉ～！」

悲痛な叫びを上げながらハンターから逃げるパトリック。今回も活躍は出来なさそうだ。

一方、この追いかけっこを見ている者がいた。

「ハンターを遠ざけてくれたことを感謝するよ」

リジェネだ。彼も認証を行うために来たのだが、ハンターを見つけたため様子を見、機を窺っていたのだ。

パトリックの背中へ向けて礼を言った後、ゲートへと急いだ。

「これだね」

リジェネは短く言ってから装置に端末をセットした。

ピピッ……。

ＭＩＳＳＩＯＮ　ＣＯＭＰＬＥＴＥ

認証に成功した。これで必要な認証数はあと３つだ。

「時間が迫っているようだね……」

タイムリミットまであと2分ほどだ。

〜牢獄〜

ここではリヴァイヴとアニューを脱落させた謎の逃走者の話題があがっていた。

「この二人の共通点は……」

「同異体同士のイノベイドね」

「でも何故この二人なんだろうか……？」

檻の中は最早会議室だ。各々が謎の逃走者の正体やその目的について詮索し、意見を出し合っている。

「こんなことして何になるんだろう？自分も危険だし、逃走者の数を減らしてもメリットなんか無いのに……」

沙慈の言葉に全員が頷いた。

〜モニタールーム〜

「ふふふっ……この方、なかなか楽しませてくれますわ」

女性は無数の映像の中のひとつを見て言った。そこには例の逃走者

が次のターゲットを虎視眈々と狙う様子が映し出されていた……。

残る逃走者はあと１９人。その中の７人がゲート解放のための認証を済ませている。タイムリミットまでに１０人分の認証を完了させ、Ｇブロックを解放することができるのか？

次回へ続く……。

ＭＩＳＳＩＯＮ－０２－３（前書き）

２つ目のミッションが終わります。

MISSION－02－3

Gブロック解放に必要な認証数はあと3つだが、タイムリミットはあと2分と迫っていた。

～Aブロック～

とある逃走者によりリヴァイヴとアニューが確保された魔のブロックに、逃走者が一人現れた。

「ハンターはいないみたいね……」

マリーだ。

彼女は周囲を見渡しながらゲートへと近づいていく。付近にハンターの気配は無いようだ。

「時間があまりないわね」

マリーは端末を装置にセットする。

ピピッ……。

MISSION　COMPLETE

認証に成功した。これで必要な認証数はあと2つだ。

～Cブロック～

今このブロックにいる逃走者は歩きながらなにやら悩んでいる。

「どうするか……」

アンドレイだ。彼は当初ミッションに参加するつもりだったのだが、10分足らずの間に4人が確保され、1人が自首してしまったため決意が揺らいだのだ。

「しかし危険を恐れていては連邦軍人は務まらんな」

少し悩んだ末に、ミッションに向かうことを決意した。

「ここから一番近いのは中央広場だな」

そう言って歩き出そうとするアンドレイ。しかし、彼は視界の端に人影を2つ捉え、顔をそちらへ向けた。

「早く逃げろ！」

声の主は刹那だ。その後方からハンターが彼を追跡している。

アンドレイは状況を飲み込み、駆けだした。

実は、刹那はEブロックの封鎖ゲート前でハンターに見つかったときから追いかけっこを続け、ハンターの注意を常に自分に向けていた。自分がハンターを引きつけておくことにより、ミッションに挑む他の逃走者のハンター遭遇のリスクを軽減しようと考えたのだ。

細胞の活性化により高い身体能力をもつイノベイターだからこそ出来る芸当だ。凡人には到底真似できない。

「ゲートからかなり遠ざかってしまった……」

しかし、そのせいでとばっちりを食らった者が出てしまった……。

〜Aブロック〜

マリーは認証を済ませてこのブロックから離れようとすると、背後から声をかけられた。

「……認証はもう済ませたのか？」

ティエリアだ。よく見ると若干息が上がっている。ハンターに追われていたのだろう。

「ええ。ついさっき……」

マリーが答えるのを聞きながら、ティエリアは認証装置へ近づいていく。そして端末を取り出し、そのまま装置へセットした。

ピピッ……。

ＭＩＳＳＩＯＮ　ＣＯＭＰＬＥＴＥ

認証に成功した。これで必要な認証数はあと１つだ。

「先ほどまで僕はハンターに追われていた。このブロックに来る前に振り切ったから、ゲートが開くまで下手に動かない方がいいだろう」

端末を手にとりながらティエリアが言った。無闇に動けば、ハンターに遭遇する可能性が高まるからだ。

「そうですね」

マリーもそれに同調した。

〜Bブロック〜

「残り時間が少なくなってきたね。うまくいくことを祈るよ……」

リボンズだ。参加する気が無いためか、ミッションなど完全に他人事である。

彼もハンターに発見されることを避けるため、このブロックに留まることにしたようだ。

しかし、そんな彼に忍び寄る足音がひとつ……。ハンターだ。

「……ん？来たか」

リボンズは目敏くハンターを発見した。しかし、すぐに逃げようとはしなかった。

やがてハンターはリボンズを視界に入れ、彼の方に向かっていった。

「そろそろかな」

ある程度ハンターが近づいたところでようやくリボンズは動き出した。どうやら、彼は純粋にハンターとの鬼ごっこを楽しんでいるようだ。

そして彼とハンターはCブロックの方へと消えていった……。

〜中央広場〜

リボンズとハンターが鬼ごっこをしている頃、このブロックに一人逃走者がやってきた。

「時間が無いな。急がねば」

グラハムだ。彼は端末に表示された時間表示を見ながら封鎖ゲートへと走っていく。残された時間はあと３０秒弱だ。

「もっと早く来たかったのだがな……」

タイムリミット間際までグラハムは行動を起こせなかった。封鎖ゲート付近でハンターを見つけたり、刹那の逃走劇に（自分から介入して）巻き込まれたりしていたからだ。

「会いたかった……会いたかったぞ、認証装置！」

ハンターボックス消滅ミッションの時と同じようなことを言いなが

ら、グラハムは装置に端末をセットした。

ピピッ……。

ＭＩＳＳＩＯＮ　ＣＯＭＰＬＥＴＥ

認証に成功した。これで逃走者１０人による認証が完了し、Ｇブロックの解放条件を満たすことができた。

「よかった……」

「やるじゃねぇか」

「活躍したかった……」

「なんとかうまくいったな」

程なくして、ミッション成功の通信が逃走者全員に通知され、封鎖ゲートが全て開いた。

だが、ミッションはこれで終わりではない……彼らは次のミッションも成功させることができるのか？

次回へ続く……。

ＭＩＳＳＩＯＮ－０２－３（後書き）

次回、劇中で活躍したあのＭＳが登場！？

ＭＩＳＳＩＯＮ－０３－１（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます。

MISSION－03－1

刹那、ロックオン、アレルヤ、ティエリア、フェルト、マリー、グラハム、シーリン、リヴァイヴ、リジェネの活躍により、封鎖ゲートが開け放たれ、Gブロックが新たな逃走エリアとして追加された。

それと同時に、エリア内に3体のハンターが新たに放出された。

現在の逃走者数は19人。それに対し、ハンターは7体となった……。

～Gブロック～

ここは、無機的なSFの世界を元にした未来の国をテーマにしたブロックだ。

「これで少しは逃げ方の幅が広がるか」

「そうだね」

解放されたばかりのこのブロックに早速やってきたロックオン、アレルヤ、フェルト。端末に表示された地図データと照らし合わせながら周囲を見渡している。

「意外に広そう……！？」

不意にフェルトが黒い影……ハンターを見つけた。

あとの二人もそれに気づき隠れようとしたが、ハンターの視界に入ってしまった。

「僕が引きつける！」

アレルヤが飛び出していった。そして彼とハンターはＡブロック方面へと走っていった……。

～モニタールーム～

「まだ半分以上残っていますわね」

無数に表示される映像を前に、関心するように言う若い女性。

「ですが、これからはそう簡単にはいかなくてよ」

彼女の手によって「０３」のボタンが押された。新たなミッションが、逃走者たちを待ち受ける……。

～地球・某海域～

この海域に一隻の空母が浮かんでいる。２ｎｄシーズンにてアロウズが使用していたものだ。デッキには６機のＧＮＸ－７０４Ｔ（アヘッド）が並んでいる。その全てが後部にコンテナを搭載している。

やがて６機のアヘッドがオレンジ色の粒子を放出しながら空母を発進した……。

～Ｄブロック～

このブロックの物陰のある草むらに、両手を組んで頭の後ろで枕代わりにし、足を投げ出して仰向けに寝ている者がいた。

「Ｚｚｚ……」

銀髪が特徴的なこの男……純粋種のイノベイター、デカルト・シャーマンだ。

なんとこの男、３０分以上もの間ハンターにも見つからず、ゲームにも参加せずにここで眠っていたのだ。

デカルトが眠り続けていると、彼の端末に通信がきた。

「……ん」

ようやく起きたデカルト。寝ぼけながら端末をとる。

「ふわぁぁぁ……何だ？このエリアに監視用オートマトンを積んだＭＳが６機向かっている……」

先ほど空母から発進したアヘッドのことだ。

「あと１５分でここに到着し、オートマトンを展開する。阻止するには、エリア内のどこかにある通信施設から撤退命令を送ればよい……」

第三のミッションの内容が明らかになった。

ＭＩＳＳＩＯＮ－０３　監視用オートマトン投入を阻止セヨ。

～Ｆブロック～

「え……これ投入されたらかなりまずいよね」

ルイスがオートマトンのデータを見ながら言った。

このオートマトンは、ハンターと同様にエリア内を徘徊する。逃走者を発見した場合、追跡しつつその位置情報をハンターに知らせるのだ。

今回のミッションでは、逃走者1人が撤退させられるアヘッドは1機までとなっている。

なお、アヘッドが装備するコンテナにはオートマトンが5機格納されている。全てのアヘッドが逃走エリアに到着してしまうと、３０機ものオートマトンが放たれてしまうのだ。

「人任せにばかりしてちゃいけないかも……」

危機感をもったルイスは通信施設を探すために動き出した。

ちなみに、通信施設はアトラクションで隠ぺいされている。そのため、逃走者全員にアトラクションへの侵入許可が降りている。しかし、ハンターもそれは同じである。

「そう簡単には見つからないか……」

通信施設を見つけるにはエリア全域のアトラクションを隅なく探すしかないようだ。

～Gブロック～

「こりゃ逃走者全員で探さないと間に合わねぇぞ」

ロックオンの言うとおり、今回のミッションは多数の協力者がいなければ達成することは不可能だ。

「何人協力してくれるかな……？」

フェルトが端末を操作しながら呟いた。そして、彼女は残っている逃走者全員に協力要請の通信を一斉送信した。

エリアに散らばった逃走者たちは、フェルトからの通信を受け取った。

「今度こそ活躍してやるぜ！」

「やるしかあるまい」

「失敗したら洒落にならねぇからやるか」

「そろそろ僕も動くか……」

どうやら全員がミッションに挑むようだ。あのサーシェスやリボンズまで……。

〜Cブロック〜

このエリアのアトラクションの一つから、逃走者が1人出てきた。

「どこにあるんだ？通信施設は……」

パトリックだ。これまでの2つのミッションで活躍できなかったため、彼は俄然やる気のようだ。

だがそんな彼に、またしても黒い影が迫る……。

「次はどこを探すか……ん？」

パトリックが正面にハンターを見つけた。ハンターも彼を捕捉し、確保するために走り出した。

「だから何でこうなるんだよぉ〜！」

ハンターに追われるパトリック。どうやら彼とハンターは、運命の赤い糸で結ばれているようだ……。

〜Eブロック〜

「地道な作業だな」

幽霊屋敷のアトラクションの前でセルゲイが言った。全てのアトラクションをしらみつぶしに探すとなると、やはり時間と労力がかかるのだ。

「さて、入るか……」

セルゲイは幽霊屋敷の中へと消えていった……。

～Aブロック～

「このミッション、厳しいものになりそうだ」

ミッションの内容を確認したアレルヤが言った。Gブロックではハンターに見つかったが、無事に逃げきっていた。

「僕も捜索に参加しないと……！？」

通信施設を探そうとしたアレルヤだったが、進行方向にハンターを見つけ、曲がり角を利用して隠れた。そして少しだけ顔を出して様子を窺う。

「……行ったかな？」

うまくやり過ごすことができたようだ。

気を取り直して再びGブロックへ向かおうとするアレルヤを誰かの声が止めた。

（逃げてばっかりなんて御免だぜ）

その声はアレルヤにしか聞こえないものだった。

「は、ハレルヤ！？」

声の主はアレルヤの内面に存在する別人格、ハレルヤのものだった。

（ハンターなんか俺がまとめてボコボコにしてやんよ！）

「待ってくれハレルヤ。これはそういうゲームじゃ……」

ゲームのルールを理解していないハレルヤを制止するアレルヤ。だが……。

（ごちゃごちゃ言ってんじゃねぇ！体借りるぜ相棒！）

意識をハレルヤに乗っ取られてしまった。

「なっ！？……フッ……ハッハッハッハッ……ハッハッハッハッ、ハッハッハッハッハァ！喧嘩番長復活といこうぜぇ！」

彼はもうアレルヤ・ハプティズムではない。完全にハレルヤだ。

そしてハレルヤは先ほどやり過ごしたハンターを追っていった……。

通信施設の捜索を行う逃走者たち。無事に発見し、監視用オートマトンの投入を阻止することができるのか！？

次回へ続く……。

MISSION－03－2（前書き）

今回はハレルヤが……。

MISSION－03－2

逃走者たちがオートマトン展開を阻止するために動きだした。ただ一人を除いて……。

～Aブロック～

「行くぜぇぇぇ！」

アレルヤ、もといハレルヤだ。先ほど主人格が交代し、自ら喧嘩番長を名乗りハンターを追っている。

「見つけたぜ！」

ハンターを視界に捉えたハレルヤ。

ハンターの方も、ハレルヤを捕捉し、確保するために彼へと向かっていく。両者の距離はどんどん短くなっていく。

「おらぁぁぁッ！」

叫びを上げながらハレルヤはハンターの顔面にパンチをお見舞いする。

ハンターはハレルヤの拳を喰らい、数メートル吹き飛ばされて倒れた。何故かサングラスは外れていない。

「楽しいよなアレルヤ！アレルヤァァァ！」

ハンターを殴り飛ばすという暴挙に出たハレルヤ。おそらく逃走中始史上前代未聞だろう。

「次いくぜぇ！」

勢いに任せて次のハンターを探しに行こうとするハレルヤ。そこへ……。

「待ちたまえ！」

逃走者の一人が彼の背後から声をかけた。

「あぁ？何だ？テメェは」

ハレルヤは声の主へと振り返りつつ悪態をつく。チンピラぶりがかなり板についている。

「私はグラハム・エーカー少佐。ご覧の通り軍人だ」

地球連邦軍の軍服を着たグラハムが自分の名を名乗る。

「一部始終、見せてもらった。ここで看過するわけにはいかない。私は君を止めるッ！」

多少自分に酔いながらも、グラハムは勇敢にハレルヤの前に立ちふさがる。

「テメェなんかに止められるかよぉッ！」

ハレルヤは拳を握り、グラハムへと向かっていく。そしてグラハムの顔面に渾身の一撃を喰らわせようとするが……。

「甘いッ！」

「！？」

グラハムは素早い身のこなしでその一撃を回避した。ハレルヤは攻撃を避けられるとは思わなかったのか、かなり動揺している。

「ハムパンチ！」

「グハァッ！」

グラハムはカウンターの一撃をハレルヤの顔面に叩き込む。さらに……。

「ハムキック！」

「ウグッ！」

ハレルヤの腹に強烈な蹴りを入れるグラハム。あまりの威力にハレルヤは腹を押さえて前かがみの体勢になる。そして……。

「ハムチョップチョップチョォォォップ！」

ハレルヤの背中にチョップを三連発で喰らわせた。それによりハレルヤはドサリと地面に崩れ落ちた。

「何で……こんなに……強えんだ……」

「これが、ソルブレイヴスの実力だよ」
息も絶え絶えな様子のハレルヤにドヤ顔で言い放つグラハム。と、そこへ……。
「あの、すみません……」
グラハムに声をかけたのはマリナだ。ちなみに彼女はハレルヤがグラハムに殴りかかったところからその場にいて、成り行きを見守っていた。
「通信施設の捜索に協力してほしいのですが……」
ミッションへの協力を要請するマリナ。しかし……。
「あなたは先に行っているといい。私は彼に止めを刺す」
そう言ってグラハムは倒れているハレルヤに更なる攻撃を加えた。
それを見ていたマリナは……。
「……見なかったことにしましょう」
Aブロックから去っていった。ハレルヤの断末魔を背に受けながら……。
一方、グラハムは執拗にハレルヤを攻撃し続けている。
だが彼は気づかなかった。自身の背後に迫る黒い影に。そして……。

ポン……。
ポン……。
グラハム・エーカー、アレルヤ・ハプティズム、確保。残り17人。

「なんとぉッ！」

「……」

いつの間にか復活したハンターにより、二人まとめてお縄となった……。

〜Gブロック〜

通信施設を探すロックオン。だが見つからず、アトラクションから出てくる。

「ここもハズレか……」

次のアトラクションへと向かうロックオン。すると、彼の端末に通信がきた。

「ゲーム開始より3357セコンド、Aブロックにて……アレルヤとグラハム・エーカー確保だと！？」

アレルヤとグラハムの確保情報だった。

少しでも人手が欲しいこの状況での確保者、しかも二人というのはかなりの痛手だ。

ロックオンは足を速め、次のアトラクションへ向かおうとした。しかし、彼は視界の隅に黒服……ハンターを見つけた。しかもハンターは彼を捕捉している。

「よりによってこんな時に……！」

歯噛みしながらその場から逃げるロックオン。それを追う、ハンター。

こうしている間にも、時間は過ぎていく……。

〜牢獄〜

新たに二人の脱落者であるグラハムとアレルヤがやってきた。

ちなみにグラハムによりボロ雑巾となり果てたアレルヤは、担架に乗せられて運ばれた。手当を受けた後、他の逃走者と同じく檻の中に入れられた。

「まさかこの私が確保されるとは……不覚だッ！」

グラハムが口惜しそうに言う。

「ハプティズムさん、具合はどうですか？」

檻の中に横たわるアレルヤにミレイナがたずねる。

「体が……痛いよ……。作者の悪ふざけ、いや……世界の悪意が……見えるようだよ……」

途切れ途切れに言うアレルヤ。巻かれた包帯や絆創膏が痛々しい。

アレルヤの様子を見ていた他の脱落者たちは、揃って同じことを思っていた。どうしてこうなった、と……。

〜Eブロック〜

ため息とともに幽霊屋敷から出てきた逃走者がいた。

「見つからんな……」

セルゲイだ。

それでも諦めることなく、彼は幽霊屋敷の隣の小さな世界のアトラクションへ向かおうとした。

しかし、そんな彼を捉えた黒い影が……。

「ハンターか！？」

セルゲイもハンターを見つけ、走り出した。

しばらく逃走劇が続いたが、ハンターはセルゲイとの距離を詰めていき……。

ポン……。
セルゲイ・スミルノフ、確保。残り１６人。

「私ももう年だな」

確保されたセルゲイは自嘲気味に言い、牢獄へと向かっていった……。

～Ｂブロック～

このブロックのアトラクションのひとつから逃走者が一人出てきた。

「アレルヤ……」

マリーだ。アレルヤが確保されたことにかなりショックを受けているようだ。

マリーが次のアトラクションへ入っていった。それと同時に、彼女の端末に通信がきた。

「大佐まで……」

セルゲイの確保情報だった。

（落ち込んでいても仕方がない。今はミッションに集中するべきだ）

マリーの中の別人格、ソーマ・ピーリスが彼女に語りかける。

「ええ、そうね」

マリーは頷き、通信施設の捜索を再開した。

〜Eブロック〜

セルゲイの確保から数分が経過した頃、このブロックに逃走者が一人やってきた。

「次はここだ」

刹那だ。

彼は、先ほどセルゲイが調べようとして断念したアトラクションへと入っていった。

しばらく進んでいくと、このアトラクションとは明らかに意匠の異なる区画を発見した。そこへと進む刹那。

「どうやらここで間違いないようだな」

ついに通信施設を発見した刹那。指示に従ってタッチパネルを操作していく……。

［撤退命令、送信完了］

ＭＩＳＳＩＯＮ　ＣＯＭＰＬＥＴＥ

撤退命令を送ることに成功した。これにより、逃走エリアに向かっているアヘッド1機が隊列から離れ、帰投していった。残りはあと5機だ。

その後、刹那は端末を操作し通信施設の発見を残りの逃走者全員に知らせた。

タイムリミットは迫る。果たして残りのアヘッドを撤退させ、監視用オートマトンの投入を防ぐことはできるのか！？

次回へ続く……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9258z/

機動戦士ガンダム00　～run for money 2314～

2012年1月12日20時50分発行